Title	階級闘争説に於けるマルクスと其の先駆者
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.8 (1926. 8) ,p.1001(83)- 1025(107)
JaLC DOI	10.14991/001.19260801-0083
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260801-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

階級闘争説に於けるマルクスと其の先驅者

平 井 新

凡そ、マルクシズムの體系中、就中異説區々として、毀譽褒貶相半ばするもの階級闘争説に若くものは無いであらう。而して其の之ある、固よりマルクス及びエンゲルスが其生前、斯説に關する系統的敘述を興えず、又其諸著中に現はれたる断片的用語章句の適々多様多岐にして、其眞意捕捉の難澁なることに其責の一半を歸せざる可からずとするも、而も他方斯説を論評する者が、多くは、巷間の傳統的臆説を固執して、更に積極的詮鑿、究明の勞を執らず動もすれば遽に嘲殺的態度に出でんとするの事實に由ること更に遙かに大なる事を認めざるを得ないのである。爰に於いてか、斯かる迷論臆説を排して、マルクス、エンゲルスの所論の眞意を詮鑿、確定し以て彼等の所謂階級闘争説の本質を闡明しなければならぬ。爰に Jahrbuch für Soziologie, hrsg. v. Gottfried Salomon. II. Bd. 1926 に収録せらるる Heinrich Cunow の論文 Zur Geschichte der Klassenkampftheorie を抄譯し、併て一二の蛇足を加へし筆者の婆心も之あるに他ならぬ。因に、筆者は、必ずしも悉く原著者の見解に服するものに非ざる旨を附記して置く。

二

吾人は先づマルクスの階級闘争説に關して、巷間所説の如何に深き迷妄に陥れるかを指摘して見度いと思ふ。

吾々は、殊更労働者に資本家に對する利害對立の念を深くさせて、資本家に對する労働者の闘争を教唆せんとの一念から、階級闘争説はマルクスの發見であるなどと書き立ててゐる政治的出版物の少なくない事を認める。彼等の見る所に依れば、階級とか、特殊の階級的利害等は存在するものではない。成程、職業別、身分並に之に關連する位階と言ふものはあるが、併し乍ら特に階級と言ふものは存在しない。蓋し、通例階級と稱せられてゐるものは決して、統一的なものでもなければ又包括的のものでもないから、所謂階級の一員と雖も多かれ、少なかれ共通の利害の他に、多くの個人的、職業的、政治的利害を持って居て、是等の利害が却て所謂階級的利害よりも、彼等の生活に對して重大な意義を持つてゐるのを常とする。加之是等の利害は屢々相互に相交錯して何人が一定の階級に屬してゐるかを決定するのは寧ろ困難な位である。例之工場に於ける高給の職工長の如く、自らは肉體的労働を營まないが他の労働者に労働を配布し、之が監督の任に當れる者を労働者階級に加へる事が出来るであらうか。而して大地主の階級は如何であらうか。幾何の所有地と家畜とを持って、普通の農夫でも大地主になれるだらうか、縦令一定の所有地を持ってゐる農夫を大地主に加へても、而も其の負債の種類、土地の位置、交通及び販路の關係からして、相互に全く異つた利益を持つてゐる事を看過してはならない。

以上述べしが如き論據から、彼等は常に次の如く論を結んで謂ふマルクス及び其一味の觀念するが如き階級は存立するものではない。階級とは斯くて一個の想定物である。其故にマルクスの階級闘争説は、支持す可からざる假定の上に基けるものである。

斯種の見解は、社會組織を研究せる經濟學的社會學的著作の裡にも之を散見する事は決して珍しい事ではないのである。是等の著書と雖も勿論歴史の經過と共に、分業、職業別、財産並に所得の分配に基いて、階級が構成せらるゝ事を否定しないが、併し乍ら階級を以て全く、漫然不確定の構成物となし、其成員相互を結合せる階級的利害の如きは、之を歴史的發展の上から見れば、一般社會的、國政的利害に比し、殆んど顧慮するに足りない底のものであると做して居る。彼等以為らく、カール・マルクスが共產黨宣言の中で、『凡て既往の歴史は階級闘争の歴史である』と言てゐるのは、歴史的事實を全然誤解せるものである。成程、既往を顧れば、夙に古代希臘及び羅馬に於いては、一種の階級闘争はあつた、併し乍ら、諸國民の歴史的發展の跡を通觀する時は、階級闘争は、單に第二義的の役割を力めたに過ぎるのみならず而も又階級闘争の結果は、決して社會の進歩を齎さず、寧ろ社會生活の完全なる混亂を誘致せしのみであつた。國民の下層階級を抑壓し、以て彼等の階級闘争を煽唆しても、社會の改造更新が行はれざることは固り自然の數である、況して積極的建設の創造おや、唯々齎らざるものは獨り社會の破壊あるのみである。

或は謂ふ、マルクスが、階級闘争を政權攫取の手段として労働者階級に推舉したのは、只管、資本家に對して労働者を煽唆し以て戦闘部隊を組織せんとの政治的野心に基くものである。這般の

消息を傳ふる好適例はグシュタフ・シュモラーである。彼に由ればマルクスはブルジョワジイに對する憎惡から、かゝる階級闘争説を懷抱するに到れるものである、即ち彼は其著『一般國民經濟原理』(本書の一部は一九一八年其夫人に依て、『社會問題、階級構成、労働者問題、階級闘争』なる標題の下に印刷された)に於いて論じて謂ふ、

『目的を意圖せる階級精神を助成することは、若し之に依り却て、狂妄なる憎惡、嫉視を促し、或は他階級との友誼的關係を破壊し、蔑視するに至るの所縁とならなければ、必ずしも咎む可きものではない。マルクスは悲觀論者であり、憎惡の傀儡であつた。彼がプロレタリアの不満、就中階級的憎惡を助成せしむ可き總てのものを是認するに到れる所以のものは、一つに彼が唯だ一八四〇年より一八六〇年に到る英國の社會状態を識れるのみにて、更に獨逸の社會状態を究めず、彼の思想又心理的、倫理的、政治的基礎を虧き、更に彼の精神が總ゆる憲法史の機械論並に恒に缺く可からざる平和の建設者たり、仲裁者たる可き法律及び公的權力に無關心なりしが爲めである、全獨逸社會民主主義の運動が嫌ふ可き情熱地獄の邪道に彷徨へる所以の原因は、一方に於いて、マルクスの逐客的猜忌、彼の暴君的憎惡、彼の熾烈なる情熱と他方に於いて下層プロレタリア及び盲目的煽動家の禽獸と撰ぶ無き粗暴とに存する』

予の見る所に依れば多數の社會學者を導いて、隠れたるマルクスの動機を付度し、階級闘争並其歴史的發展過程に於ける役割に關し、斯かる淺薄固陋の批評をなすに到らしめた誤謬は、彼等が之を觀察するに當て多くは單に現今の政治道德的立場並に傳來の社會道德的見解を固執し、階級概念並に階級闘争觀の歴史的發展の問題を全く度外視してゐると云ふ事に存する。併し乍ら、予の見る所では斯種の淺薄な研究は何れも、階級闘争は決してマルクスの發見と言ふ事は出來ない、マルクスは階級論の方面に於いて多數の先驅者を有し是等の先驅者から多くの思想を採り入れたものである事を證明せんと欲するもの様に思はれる。

三

貧富の兩階級並に支配、被支配の兩階級は既に古代國家に存在して居た。而して是等兩階級間の闘争は當時の史實に決して乏しくはない。併し乍ら是等階級間の對立が如何に顯著であつたか、將又是等の階級構成並に其歴史的基础に關する説明を、此當時の著作に覓むるも徒勞である。奴隸並に國政より除外された不自由なる市民の存在は、自然の所與であり、國家的必然であり、社會生活並に社會秩序に缺く可からざる基礎と看做されて居た。蓋し貴族及び自由民が彼等の生計に必要な労働を自ら營まざる可からざるものなりとせば、彼等が、國家及び町村の政務に鞅掌し、軍事の訓練を受け、而て國務を顧る可き閑暇を何處に求む可きであるか。

國民を分ちて、支配階級並に被支配階級の區別を設ける事は當時の國家學者には、秩序ある國家の必然的前提であると考へられた。アリストートルすら、奴隸制度は、労働要具が人間の指揮を俟たずに奴隸の勞務を營む事を得るに到つて始めて撤廢せらるゝであらう、即ち、梭が獨り手に織り、チテルが獨り手に奏でられるに到つて始めて撤廢せらるゝであらうと信じて居た事は人の知る通りである。

加之當時の人々は諸般の國家的制度を、専ら人間の資性、及び能力の表現に過ぎざるものとなし、從て又奴隸制度を以て人性の相違より來れる自然的結果と考へた。奴隸は、無智、低劣の者であると考へられた。

プラトー及びアリストートル時代の見解に據れば、奴隸が奴隸たる所以は、彼が劣等、無智蒙昧であり、半獸であるからである。併し乍ら此見解は、奴隸の一部には戦争の捕虜があり其中には數多の勇士や、故國の政事に活動せし人士があると共に、奴隸の他の一部は、海賊に捕はれて、賣買された人々であると言ふ事實を指摘すれば、容易に之を反駁する事が出來た様に思はれる。併し乍ら斯かる異論は、遂に殆んど顧みられなかつた。アリストートルは其『政治學』(第一卷、二、一七頁)で、捕虜が、打敗かされて、捕へられたのは、勝利者よりも能力の劣れる證據であると主張して、斯かる駁論を一蹴した。

奴隸自身も又アテネの有權市民と同様に、自己の地位を今日の被抑壓階級とは全く異なる立場から見た。勿論當時、無産の平民も、奴隸と同じく市民權を剝奪せられたのであると感じた。併し乍ら今日吾人の所謂階級意識及び階級連帶感情と名付くものは缺けて居た。奴隸は自分達が酷使せられたと感じて、此處彼處で主人に反抗したが併し乍ら彼等は尙未だ階級對立を識らなかつた。其故に彼等は、彼等の敵をば全體の上流主人階級と考へないで、彼等を虐待する個々の主人であると考へた。彼等の反抗は精々主人の手に握られて、抑壓のために用ひられた國家權力に對して向けられた位のものである。

中世に於いても亦、國家は、所謂下層の身分が上流の身分に従ひ、上層の身分は又國權、就中教會の命に従ふ場合にのみ成立するものであるとの見解が一般に行はれて居たが併し乍ら此從屬關係を自然に附與された關係と見ないで、寧ろ神の與え給ふた關係、別言すれば神の創造した世界秩序の一部であると考へた。斯かる見解の前提如何に關しては加特力教會最大の煩瑣哲學者トーマス・ダキノが之を説明してゐる。簡単に要約すれば次の如くである。即ち國家は道義的生活を營むために全く必要なる制度であり、教會に次いで人間最高の協同生活である。併し乍ら國家が欲望充足て自己の社會的目的を遂行するためには分業及び職業の分化が必要となる、即ち必然的に國家の中に不快、苛酷、汚穢な勞働を營み、而も教養無きが故に國政並に市政から除外せらるゝ集團が存在しなければならぬと、併し乍ら其意は支配階級が所謂『卑賤なる人々』を自己の思ふ儘に處理し得ると言ふのでは無い。トーマス・ダキノに據れば、彼等は、教會の命令を奉じて、好意的に且つ正當に進退したのである。

是等の見解が、斯る階級組織に對する被支配階級の反抗を防止せしは、自然の數である、蓋し、斯る階級別が自然に與えられしものであり、神の與え給ひし物なりとせば、之を撤廢する事は無稽の企である。縱令被抑壓階級が支配階級に反抗しても彼等の要求は、決して總ての階級組織を撤廢する迄には臻らず、唯單に不幸を除去し、自らも亦、地位の向上を望んだに過ぎないのであつた。爰に吾人の看過してならぬのは、當時の身分並に職業別は、今日の階級とは別種のもので而も全く異つた社會的生活關係に基けるものであると云ふ事である。例を手工業者並に職人階級に採れば、

後者は決して親方階級と全く反對の利害を有する階級ではない。職人階級は寧ろ親方階級に到るまでの過渡的階級である。職人は親方と全く違つた生活條件の下に生活して居なかつた。通常彼は親方の家で起居し、而して一定期間、職人として働いて、應ては親方の娘と結婚して、親方の仕事を承け継いだり、或ひは自分で仕事を興したりするのは決して珍しい事ではなかつた。今日大工場主と労働者との間に存するが如き社會的罅隙は存在しなかつたのである。

中世末期の大都市、主として商業都市には、職人階級の他に、之より地位のもつと低い純粹のブルジョア階級が既に存在してゐた。併し乍ら此階級は決して、同一の經營に従事して、特殊の地位を有する統一的集團ではなかつた。此階級の少部分は所謂「不正なる」營業に従事せる體操と労働者から成り、其大部分は、病人、不具者、乞食、労働嫌ひの寄食者から成り、何等明白なる階級的性質を有ては居なかつた。彼等は此處彼處で、有産者の同情と慈善に訴へるために屢々結合したが尙未だ、同種の感情を持たず加之上流階級に對して鞏固なる結束を作ることの必要を理解しなかつた。彼等は富者を嫉み、其の富を羨んだ。而して富者の喜捨で生活した。彼等は又何か特別の保護を調達し得た同僚を憎惡を以て迫害し、之を憎む可き競争者と考へた。

此集團は今日の意味に於ける眞の階級意識を有せず、況して、上流階級に對し、團結して、闘争的態度を採る事はなかつた。勿論彼等と雖も自己の地位の壓迫を感じた。而して又屢々他の黨派の驥尾に付して十五世紀、十六世紀の都市の政争に参加したのであるが、併し乍ら其多くは、何時來ることも無き共產社會に、儼なき一縷の望をよせて、後に憂を遣り、埃つも甲斐なき幸福に見果てぬ夢路を追ふてゐた。

斯くて十六世紀、十七世紀には、爲政者に對する各種の建白、社會改良の幼稚な計畫、より善き社會秩序並に國家秩序の模型として理想國家を描く者も少くはなかつたが併し乍ら此時代の文献中に、歴史的現象としての階級構成に關する言説は到底覓む可くも無い。

四

近世的大國家の勃興と共に、最早從來の如き狹隘なる都市に限られざる政治的闘争の發生するに到りし事、分業の進歩、大商業の發達並に之に伴ふて惹起されし富の分化等、是等の事實に促れて十八世紀の道德哲學及び法律哲學は、競ふて、現前に行はれつゝある社會組織の變遷を研究するに到つた。加之是と共に數多の社會的弊害も又續出するに到つた。

加之、工場工業の勃興に伴ふ手工業衰微の結果として労働關係は爰に一變した。一方管に労働者の數は益々増加し、又生産過程に對する彼等の社會的意義も増大すると共に他方彼等の經濟的地位は資本家のそれに比して著しく劣惡となつた。自ら資本家とならんとこの期望も今や労働者には望み難なものとなつた。労働者は、少數の例外を除いて自己の境涯を脱する事が出来なくなつた。斯くて又労働者と資本家との關係も益々稀薄となり、此上兩者を結び付ける紐帶は専ら賃銀契約のみとなつた。今や労働者と資本家とは終生、互に全く異なる別個の社會階級の中に生活する事となつた。斯る發展の結果として、十八世紀の社會學者並に社會哲學者の見解が自ら變化するに到つた。彼等が新社會關係を觀察するに當て、屢々逢着せし問題は『斯る階級別は何處より到來せしや、其原

因は如何、更に斯る階級別は社會の進歩を促進するものなりや將之を阻害するものなりや」と云ふ事であつた。

當時の社會哲學者は斯る問題を提出して、多くは次の如き結論に到達した。階級別は身分別、職業別と殆んど撰ぶ所なきものであつて、全く最初に分業並に職業分化の自然的結果である。而して、是等分業及職業別は亦人間天賦の資性の相異と關連せるものであると。彼等の見解に據れば、階級別は又幾分は權力、即ち古代に於ける強力なる民族の弱少民族征服に基くものであると。

斯かる社會哲學者の見解を代表す可き好個の典型はジョン・ミラー John Millar の著 „Observations concerning the distinctions of ranks in society. Lond., 1771” である。彼は尙ほ未だ、身分、職業別、階級を區別しなかつた。彼は總て是等の發生原因を、一方に於いて、分業の進歩並に之より生じた職業の編制、他方に於いて、原始社會に於ける戦争指揮官の成立並に隣邦異民族の征服に究めた。

吾人は又 Karl Dietrich Hüllman „Geschichte des Ursprungs der Stände in Deutschland.” Frankfurt. a. d. O. 1806) 及び C. Meiers „Geschichte der Ungleichheit der Stände.” Hannover 1792) 等の如き獨逸の社會史家の研究の裡にも尙ほ未だ階級概念を發見する事は出來ない。彼等は只舊來の階級を認めたに過ぎない。其故に彼等の敘述は、唯だ單に貴族、僧侶及び彼等に依れば産業階級、農民階級並に官吏階級から編制せられた所謂第三階級が如何にして成立せしや、更に是等の階級は中世末期の國家、殊に地方政府の憲法中に如何なる法律的地位を占むるかの問題に終始してゐた。労働者階級としての労働者階級即ち當時の所謂第四階級は尙ほ未だ彼等の顧らざる所であつた。

トマス・ホッブスの國家發生理論を承けて、更に十八世紀社會の階級編制を究めた者に Simon Nikolaus Linguet があつた。併し彼も亦階級と身分とを區別する所無かつた。彼は其著 „Theorie des loi civiles ou principis fondamentaux de la société” 1767 に於いて、社會階級の起源を權力行爲に究めた。彼謂へらく、經濟の發展に伴ふて、狩獵群、漁獵群の外に、平和的な土地耕作者並に遊牧民の小さな社會が發生した。臆て狩獵群は財産に誘惑されて、土地耕作者を襲ひ、之を征服し、其財産の大部分を攫得して、彼等を服従と隷屬の境涯に陥れた。斯くて社會の一部が他の一部に服従する事となり、其の結果今日の政治的社會、若くは真正社會の根本的基礎たる所有別、權力別、階級別が發生する事となつたのであると。

勿論、下層階級の上層階級に對する服従關係の形態は時代の經過に伴ふて多様に變化した。原始民族の暴力的隷屬に次いで、古代の奴隸制度が現はれ、此の後を承けて中世の隷屬が現はれ、臆て又中世の隷屬に續いて近世の雇傭制度が現はれた。而も、隷屬の形態が外面的に如何に變化しても、下層階級の支配階級に對する隷屬の事實は依然として渝るところが無かつた。多くの人は、貧者が餘儀なく自己を奴隸として、或は労働者として資本家に身賣りをする今日の雇傭制度、賃銀奴隸制度を古代の奴隸制度とは全く異なるものである、何んとなれば今日の労働者は自由であるからである、と考へて居るが、ラングに依ればそれは一個の僞囑である。彼謂えらく、古代の奴隸制度は賃銀制度に遙かに勝れるものである、何となれば、賃銀労働者は、失業して、餓死すると云ふ、古代の奴隸の全く知らない恐怖に常に嚇かれてゐるからである。ラングは其著四六六頁で次の如く言

つてゐる。曰く、

『汝等は、彼が自由だと言ふ、嗚呼、併し乍ら不幸は正しく其處に存するのだ。成程、彼は何人の事も顧慮しない。併し、何人も亦彼を顧慮しない。彼を雇ふ時には出来だけ安い賃銀を拂ふ。彼に約束した僅少の賃銀は、労働者の生活資料の價格にも充たない。無理に仕事をせよとせよ爲に監督者を付ける。狡猾に怠けて力の出し惜みをしないかとの懸念から、労働者を驅使し、鞭撻する。出来るだけ長、同一の勞仕事に従事し度いとの考が労働の敏速を妨げ、労働要具を毀しはせぬかと懸念する。彼は確かに自由である。彼を不憐に思ふのも正に其の爲めである。人は彼を労働させる場合の方が遙かに思遣りが無い。彼は労働者の生命に關する場合に却て大膽となる。奴隷は主人に取て、貴重である。何となれば、奴隷は主人にとつて金に値したからである。併し乍ら労働者は、之を使役する富裕の浪費家には何の價値もない。奴隷制度の行はれし時代に在ては人間の血が一個の價値を有した、少くとも市場で賣買せらる相場だけの價値を有した。併し賣られなくなつてからは、實際に於いて何等の價値を有しなくなつた』と。

階級相互を分ち、上層階級に支配權を保障するものは、ランゲに依れば所有の別である、が單なる富ではなくて、上層階級が労働要具を領有し、之に依て、無産者の労働を強制するの事實に依るものである。

ランゲと類似の見解を有するものは、„Réflexions sur la formation et la distribution des richesses 1766”の著者 Anne Robert Jacques Turgot である。彼に依れば、階級相互を分つものは、常に所

有の大小のみならず又所有の種類の相違、例之、土地所有、工場の所有、享樂品の所有、並に單なる労働力の所有之である、彼は其著六〇節に於いて、産業階級に關説して曰く

『社會の種々なる欲望に應じて、無限に多様な産業的労働に従事してゐる全階級は二個の小部類に分たれる。其一は、企業家、工業主であつて何れも大資本を擁し、之を前貸して、利殖してゐる。其二は、單に自己の労働力を所有するのみで、自己の労働以外何物をも投資せず、自己の勞銀以外何物をも獲得せざる單純なる労働者である』と。

五

佛蘭西大革命の經驗を按て、爰に階級別の認識は更に鮮明となつた。革命の當初、第三階級は貴族、僧侶と全く利害を異にする統一的階級と考へられたが、革命の経過と共に、所謂第三階級は更に利害を異にする多數の階級から成つ居る事が判明するに到つた。之と同じく貴族、僧侶も又幾多の下位階級に分たれて居る事が認められるに到つた。

當時の階級別並に之より生ずる利害の對立を最も深く洞察せしは Jean Paul Marat であつた。彼の階級闘争觀は既に後年マルクスの懷抱せし階級闘争説の各種の根本的要素を包藏してゐる。革命時代の階級闘争に關する彼の特別の著書と言ふ可きものは無いが、彼の見解は『人民の友』並に „Journal de la république française” の幾多の論文中に散見する事が出来る。固より彼の見解は、理論的に若くは歴史的實例に依て確立せられしものでは無く、適く眼前に展開する現象を觀察して得たる結果に他ならぬ。

マラーの見解に依れば、一七八九年乃至一七九三年の全佛蘭西革命は、特定階級が自己の特殊の利益を貫徹するための闘争である。是等の階級とは、宮廷貴族、封建貴族、ブルジョワジイ、(金融業者、大相場師、大企業家)知識階級、(富有なる學者、高等裁判官、代理人、顧問官、辯護士)裕福なる商人(所謂商業を營む中流階級)自作農民、並に眞正の國民、(小手工業者、普通の勞働者及び職人、日傭人、小農人、小官吏及び無産の知識階級)である。而して此最後のものをマラーは根本に於いて統一せる大プロレタリア階級と考へた。大ブルジョワジイ及び裕福なる商人は先づ革命に依て、封建貴族、宮廷貴族の羈絆を破らんと欲した。之に依て、富裕なるブルジョワジイ、殊に金權貴族政治及び其御用を力むる知識階級が國民議會及び地方行政の牛耳を握る事となつた。それから裕福なる商人(シロンド黨員)が政權を得、今や(一七九三年の春)人民自身が結局政府を組織する段取となるであらう。何んとなれば、嘗て第三階級が貴族の特權を打破せし時と同様に、無産者も亦富者の特權と掠奪物とを奪ふために自由の原理を利用する事が出来るからである。

一七九一年九月二十一日の『人民の友』誌上で、マラーは、貴族政治に對する所謂ブルジョワジイの闘争を簡単に敘べ、かくて、何故に第三階級の上部が、一度、政權を握るや、間も無く貴族、僧侶と結托して、以て自己の地盤を擁護し、下層階級の攻撃に遇ふまでも王政を支持するに到つたかの理由を説明した。マラーに依れば、富裕なるブルジョワジイをして斯かる態度に出でしめた利害の動機は正に次の如くである。曰く、

『是等名譽慾に燃ゆる隱謀家、怯懦な宮廷の動物の周圍に、纏て、支持者として、衛兵として、貴

族、僧侶、軍人、大官、行政、司法の高官、財政家、投機商、公けの吸血鬼、饒舌家、横紙破り、宮廷の毒蟲、一言にして言へば、自己の地位、財産、希望を専ら政權の濫用に繋いでゐる總ての人々、腐敗、企業、浪費を利用せんとする總ての人々、及び利益のために誤れる事態の永續に興味を持つ總ての人々が娯集した。而も亦是等の周圍に漸次多くの取巻が現はれた、即ち一方に於いては富豪や不規律な家庭の子息の濫費のお陰で致富の機會を得た商人、高利貸、小手工業者、奢侈工業の勞働者、文士、學者、藝術家があり更に又他方に於いて、自由を、利殖を妨げる障礙の撤廢であると考へ、更に所有や、我儘な享樂生活の保障であると考へてゐる大商人、資本家、及び安逸を覓めるブルジョワがあつた』と。

更に説明して言ふ、革命の推移と共に、市民を各種の階級に分つ可き各種利害の對立が益々明瞭に現はれた。第三階級と雖も決して統一せられたものと見る事は出来ない、何となれば、それは、各々利害、所有及地位を異にする幾多の階級を包擁せるからである。斯の如く利害關係生活關係等の相違は、纏て、人生觀や、慣習、嗜好の相違を齎らす事となる。即ちマラーは『人民の友』六六九號で次の如く言つてゐる。

『總ての他の君主國と同様、フランスに於ても國民は、種々異つた利害を有する多數の階級に分岐した。而して是等の階級は、地位や所有の不平等に依てよりも寧ろ其教養、偏見、嗜好、習俗、及び全生活方法に依て、相互に分岐せるものである。例之、貴族、僧侶、官僚、財政家、裕福なるブルジョワと、無産者、即ち支配階級と被抑壓階級とである』と。

是等の所説に由て觀るも明かなるが如く、既にマラーは、總て各階級の特殊の見解、觀方、及び特殊の思想圈、マルクスの語法を用ふれば、特殊のイデオロギイは當該階級の労働條件、生活條件に適應して構成せらるゝものであるとの見解を抱いてゐた。

同種の思想は又ルイ・ブルジョア・ド・Louis Proudhomme の編輯せし急進ジャコバン主義の機關誌“Révolutions de Paris”にも窺ふ事が出来るが、マラーの『人民の友』に見るが如き鋭さは無く、又寧ろ倫理的色調を帯びてゐた。其後姑く政黨の軋轢を階級闘争と認むる思想は姿を消してゐたが、十九世紀の四十年代の初に到つて新なる革命時代が来るや、再び階級闘争の觀念は擡頭した。併し乍ら、有産階級の利害の闘争は所有別の擴大、産業の進歩、富の増大と相俟て愈々深刻となるこの見解は夙に二十年三十年代のフランスの政治上の文献の裡に屢々表明せられてゐる。其顯著なる者は François Auguste Mignet の有名なる著作“Histoire de la Révolution française” 1824 である。

ミネーは、貴族を、宮廷貴族、官僚貴族、封建貴族の三階級に區別した。彼を僧侶を二階級に岐し、其一を、僧正管區、僧院、寄附に依て莫大なる収入を得てゐる僧正に、其二を所謂『使徒の事業』を續けてゐる普通の牧師とした。更に彼は革命時代の第三階級を二つに岐つた。其一はバスティユ襲撃後政權を攫取した裕福な中産階級であり、其二は中産階級より民衆へ到る過渡的階級たる普通の中産階級であつてジロンド黨に屬した裕福なる商人の如きものが之に屬する。是等の階級の他に、ミネーは最下層の階級として、多數の無産者即ち『民衆』を擧げた。此『民衆』は彼に由れば、其利害を特にロバスピエール主義者、マラー主義者、エーペルト主義者の諸黨派に代表するものである。之以上ミネー

一は革命時代のフランス國民の階級編制を詮釋しなかつた。即ち彼は『民衆』の階級別を認めず、從て又上記の所謂急進的黨派の間に行はれし闘争を理會しなかつた。

又此時代の著作には、何れも、從來尙不明瞭なりし階級の概念が、從來に比して遙かに嚴密、明確に述べられてゐる。例之 M. Granier de Cassagnac は其著“Histoire des classes ouvrières et des classes bourgeoises” Brüssel 1838 の中で、労働者階級とプロレタリアを同一視する事を非難してゐる。彼に依れば、労働者階級更に嚴密に言へば、賃銀労働者階級は唯纔にプロレタリアの一部をなすに過ぎない。プロレタリアには労働者階級の外、乞食、盜賊、娼婦等が之に屬する。労働者階級の特徴は單なる無産や、手から口への生活では無く、彼等が賃銀のために資本家に労働を給付しなければならぬと云ふ事實に存する。

六

カール・マルクスは一八四三年十一月巴里に居をトし、此地に亡命中、初めて前記フランスの諸著作に親む事となつた。之より先、彼は夙にフランス革命史に少からざる興味を持つて居たが、今此地に來て更に Augustin Thierry, F. Guizot, Pierre Leroux, Jean Charles Léonard Simonde de Sismondi, Philippe Benjamin Buchez 等の著書を深く研究し、又サン・シモン派、フリエエ派の運動を研究した。

マルクスが又マラーの『人民の友』及びブルジョアの『巴里の革命』を知つて居た事は疑ふ餘地はない。其證據には、當時マルクスは此二書を購ひ、彼の死後、エンゲルスの手渡し更にエンゲル

スの没後伯林社會民主黨記録保存所に移された。

由是觀之、マルクスが階級闘争説を發見せし者であるが如く説くのは斯説の歴史を全く誤解してゐる證據である。事實彼は決して何物をも發見した譯ではない。彼は前記の諸著に現はれた階級闘争説の種々の要素を收拾補綴して、之より自家の結論を導き出したに過ぎぬ。事實上、マルクスの階級對立觀並に初期の階級概念は著しく、傳來の階級闘争説の影響の跡を遺してゐる。彼は近世的階級闘争を以て、單に有産階級對無産階級、更に嚴密に言へば、賃銀勞働者階級對大企業家階級の闘争と看做してゐる。爰にラング及びチュルゴーの思想の影響を觀取する事が出来る。『共產黨宣言』に於いても亦現今の闘争は根本的には、勞働者階級對大企業家階級との單なる軋轢であると述べられてゐる。勿論『共產黨宣言』では眞正のブルジョワジイの外に『中産階級』なる語が用ひられてゐるが、それは滅亡に瀕せる而も反動的なブルジョワジイの附屬物であると、數行で片付けられてゐる。加之革命後に現はれた前記フランスの著作に於けると全く同様に、『共產黨宣言』に於いても亦勞働者階級とプロレタリアが全く同視せられてゐる。斯の如く先づ、社會階級を二分した動機に就て『共產黨宣言』は次の如く云つてゐる。

『吾々の時代、即ちブルジョワジイの時代の特徴は階級對立が單純化した事である。全社會は益々敵視せる二大陣營、即直接相互に對立する二大階級に分裂しつゝある。ブルジョワジイとプロレタリア即之である』と。

マルクスは初期の著作では、身分 Stand と階級 Klasse とを同義語として用ひてゐる。例へば『ヘーゲル法理學批判』では勞働者階級を尙ほ身分であると説き更に『共產黨宣言』第一部でも次の如く言つてゐる。

『古代の歴史を繙く者は、殆んど到る處に於て、社會が種々の身分に全然區分され、社會的地位の多様な等級を見出すであらう。古代羅馬に於いては、貴族、騎士、平民、奴隸があり、中世に於ては、封建諸侯、家臣、同業組合の親方、職人、體僕があり且つ是等階級の殆んど總てに、又夫々の特別な等級があつた』と。

爰に、封建諸侯、同業組合の親方、職人が、單に階級と説かれてゐるが、事實上等はエンゲルスの定義に従へば決して社會階級では無く、寧ろ國家で定められた特殊の身分上の權利義務を有する身分であつたのである。

遮莫マルクスは、佛蘭西諸家の傳統的なる、不明瞭なる階級概念を何時迄も固執しては居なかつた。一八四七年公刊された『哲學の貧困』の裡に這般の消息を窺ふ事が出来る。彼以爲らく、

『勞働者階級の解放條件は、總ゆる階級の撤廢であること、恰も、第三階級 Der dritte Stand の解放條件、即ちブルジョワ制度確立の條件が總ゆる身分の撤廢であつたのと同じである』と。

『爰に謂ふ身分とは、封建國家の身分てふ歴史的意義を有するもので特定の限られた特權を有する身分の謂である。ブルジョワジイの革命は是等の身分と特權とを併せ撤廢した、ブルジョワ社會には只階級のみが、依然として存在する。從てプロレタリアを第四の身分 „vieter Stand” と名付ける

のは全く歴史と撞着する』云。

マルクスは後年の著作では常に、階級と身分とを明確に區別してゐる。即ち前者は、一定の經濟關係に基く經濟的、社會的集團であり、後者は、一定の身分的權利を有する國家的、政治的集團である。フェルデナンド・ラッサルは労働者階級を第四の身分と名付けたが忽ちエンゲルスのために非難された。

應てマルクスは一八四二年乃至五二年に於けるフランスの政治的闘争を親しく見聞するに及んで次の如く確信するに到つた、即ちブルジョワ自身も亦種々の階級より成れる事、從て單に『ブルジョワ』とプロレタリアの對立を考へるのみでは到底此時代の社會運動を理會する事が出来ない。かくてマルクスは『佛蘭西に於ける階級闘争』の中では、フランスのブルジョワを大ブルジョワと小ブルジョワに分ち更に前者を金融的ブルジョワと工業的ブルジョワに分つた。彼は又一八五二年に公刊した『Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte』の中で大小ブルジョワを特殊の階級として考察してゐるが、此區別法は、曩に一七八九年乃至九四年のフランスのブルジョワを富裕なる中産階級と無産者に落ち行く過渡的階級を構成する貧困なる中産階級とに分けたミネー Mignet の區分法を髣髴せしむるものがある。

マルクスが自家獨特の階級闘争説を建設するに到つたのは、倫敦に移つて、英國の經濟生活と、之に伴ふ政治的隨伴現象を自家特有の見地から研究するに到つてからの事である。悲しい哉マルクスは自己の階級闘争説に關する何等組織的なる敘述を遺してない。マルクスがかかる研究を著すは心算であつた事は、後年エンゲルスがマルクスの遺稿中で發見し、資本論第三卷第二部の附録として公にした斷片が之を證してゐる。固より此斷片は這個研究の序論をなすものに過ぎないが、之を他の斷片的所説と照合比較するときは、マルクスの階級闘争説の眞髓を捕捉する事強ち不可能ではない。

マルクスは現代の資本的社會の社會階級を三の主要階級に分けて、其特徴を次の如く述べてゐる、『單なる労働力の所有者、資本の所有者、土地所有者、にして其各々の所得の源泉は勞銀、利潤、地代である。かくて、賃銀労働者、資本家、地主は、資本家的生産方法に基く近世的社會の三大階級を形成するものである』云。

是等三主要階級はまた夫々小さき部分階級に分れ、更に又是等總ての部分階級の間には、或種の過渡的階級が存在する。マルクスは労働者階級のみを同一の労働條件並に本質的に同一の生活條件を有する統一的階級と考へた。勿論マルクスは、農業労働者の經濟的地位並に勞銀關係が、殆んど何れの國に於いても工業労働者に比すれば遙に劣悪であり、加之地主に對する隷屬並之より受くる絞取の程度も遙かに大なるの事實を認めたと、彼は是故を以て、直ちに、農業労働者と工業労働者を區別し、以て兩者を夫々特殊の階級とは考へなかつた。之に反してエンゲルスは例之『獨民農民戦争』、『Der deutsche Bauernkrieg』及『New York Tribune』の一論文で、屢々獨逸の農業労働者階級を特殊の階級と做し、更に之を、獨立の經營を營む自由なる小農と、大農とに分けてゐる。マルクスに依れば、賃銀労働者階級の間存する個々の職業團體は決して階級と考ふ可きではな

い。是等の個々の職業團體の現代の資本的社會に於いて占むる地位はその勞働關係、勞銀關係に就て見るも將又、資本家に對する從屬關係に就て見るも、決して、相互に異なる經濟的條件に基づくものではない。例之勞働者は、鑛山業に従事するにせよ、纖維工業に従事するにせよ、將又製靴業に従事するにせよ、等しく、皆賃銀のために勞働力を賣り、縱令程度の差こそ存すれ、同じ方法に依りて餘剩勞働を給付する。かくて又同一の勞働條件並に賃銀の利害が彼等を資本家に對して結合する。之と均しく醫師、辯護士、藝術家、教師等の職業は又特殊の階級と看做す可きものではない。是等の職業は共に、知識階級を構成し、マルクスの所謂一種の中間階級であつて、無産者の生活を營まざる限り、ブルジョワジイに數へらる可きものである。

之に反して、販賣の目的で商品を生産する工業家、此商品を賣買する商人、並に金融、兩換で生活してゐる銀行家は、何れも皆、資本家であるが經濟的經營の内部に於いては、種々の經濟的機能を行ひ、夫々特殊的活動範圍を有し、從つて特殊の經濟的、社會團體を構成する。マルクスは是等の團體を夫々資本家階級の部分階級と名付けた。

由是觀之、階級とは經濟的發展過程の一所産である。即ち特定の經濟的形態から發生し、特定の經濟的相互關係に基づく社會層であつて、常に特殊の同一經濟機能並利害を有するものである。マルクス(彼は初期の著作では勿論富の大小に重を置いたが)に依れば、財産の大小、所得の多寡は階級の標準としては、寧ろ第二義的のものである。二、三十人の勞働者を使役する製靴業者も、かの多數の浴鑛爐、製鋼所、輪機を有し、二、三千の勞働者を使役する大工業家と同様に、工業的

企業家の階級に屬する。更に又、庭園付きの自宅を有し、多くの小工場主よりも遙かに大なる所得を有する職工長と雖も勞働者階級に屬する。何となれば彼は賃銀勞働者だからである。社會階級は決して單に財産階級ではない。其故に財産の大小は決して階級別の標準とはならない。

爰に、階級は經濟的發展の一所産であるとの命題から、階級は毫も不變不動のものに非ずとなすマルクスの見解が生れて來るのは寧ろ當然の事である。經濟關係と共に階級の特質も亦變化する。利害闘争の經過に伴れて、漸次階級の特質が構成される。總て階級は其初めに於いては、漫然不確定の構成物であつて、勿論其成員は共同の境遇と云ふ本能的感情を持つては居るが尙未だ自己特殊の經濟的地位(階級的地位)、共同の利益による結合、及び他階級との對立に對する認識、即ち眞正の階級意識を持たない。併し發達の經過に伴ふて、總ての階級は經濟的經營に於ける自家地位の特殊性を認識し、他の社會階級に對して、自己の特殊の利害を貫徹せんとするに到る。かくて爰に階級闘争が發生する。

マルクスは『哲學の貧困』の中で勞働者階級の發達過程を次の如く述べてゐる。

『勞働者が自ら組織を作らんとする最初の要求は恒に團結の形態を採る。一方大工業は互に知らぬ多數の人と一地域に集中せしめる。競争は彼等の利益をして相反せしむるが、賃銀率の維持と云ふ雇主に對しての共同の利害は、共同の抵抗心に於いて彼等を相結合せしめる之が團結である。されば團結は、常に資本家に對して一般的競争をなし得んがために、勞働者相互間の競争を廢止すると云ふ二つの目的を持つてゐる。然るに抵抗の最初の目的は、僅かに賃銀維持の一事を出でなくても

資本家が資本家の側で、抑壓の爲めに相提携するに従つて始めの孤立的團結は集團を形成し、常に連合せる資本に對峙して、結社を維持することが賃銀の維持其事よりも彼等に取て必要事となる。英吉利經濟學者は、彼等の目から見れば、賃銀維持の爲めに設立せられたに外ならぬ結社の爲めに、勞働者が其賃銀の大部分を投ずるのを見て驚くのはこれが爲めである。此闘争——此の純然たる一個の市民戦——に於いて、凡ての要素が來るべき戰闘の爲めに相結合し、發達する。一度此點に達すれば團結は政治的性質を帯びることになる」と。

社會主義的新聞雜誌等に於いて屢々既に陳腐に歸した舊式の戰闘方法に歸れの要求を見受けるが、それは何れもマルクスの階級闘争説を誤解せるに出でたるものである。蓋しマルクスの見解に依れば、生産方法の變遷と共に闘争の條件並に之に適應する闘争の形式も亦變化するものであるからである。

階級闘争は純然たる經濟的手段に關連すると共に政治的手段に關係を有する。階級の結束鞏固となり、自己の階級利害を有効に貫徹するに到れば、最早純然たる經濟的闘争手段だけでは不十分である。蓋しマルクスに依れば、現代の國家は、ブルジョア社會の政治的組織であるが故に、若し國家秩序を動かさんとすれば、自ら一個の政治的組織即ち所謂政黨を造らなければならぬ。階級が政黨として國家に現はれても、兩者は決して同一物ではない。階級は經濟的發展から發生した經濟的社會的構成物であるに反して、政黨は一個の政治的目的を達する組織であり而も此組織は常に階級を包擁するものでは無く、多くの場合他の種々の階級の斷片をも包擁するものである。

之を要するにマルクスの階級闘争説の當否に關する近世經濟學者、社會學者の所説は、區々として今日尙ほ定説無き所であるが、Ottmar Spann が、國家學辭典新版の『階級と身分』なる論文中で『近世の社會學者、經濟學者は何れも個人主義的階級概念殊にマルクスの精神を汲めるものである』と云つてゐるのは疑も無く正しい。嘗て斯くまで、虐けられしマルクスの階級闘争説も爰に甦生して近世社會學の中に着々新生面を開拓する事となつた。惟ふに之れ斯説の論理的完備の然らしむる所なりとするも、而も現行資本主義的國家に於いて階級闘争が重大なる役割を演じつゝあるの事實に負ふ所更に大なるが故である。

(一五・七・二一稿)